

人 気 女 子 ア ナ

真 凛 二 十 四 歳

第一卷

大観衆の前で全裸の始球式

海老沢 薫 著

内 容

■ 著作権について

■ ま え が き

■ 第一章 脅迫のファンレター

■ 海老沢薫 B L O G

■ 海老沢薫 Web連載小説

■ 著作権について

「人気女子アナ 真凜二十四歳 第一巻 大観衆の前で全裸の始球式」(以下本書と表記する)の著作権は「海老沢薫」にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段(印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー)により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第61条などの罰則がありますのでご注意ください。
い。

■ まえがき

小川真凜は、民放キー局に入社二年目の二十四歳の女性アナウンサーだった。高校生の頃から雑誌の専属モデルとして活躍していた真凜は大学のミスコンでもグランプリを獲得するなど華々しい学生時代を過ごし、その流れで自身の幼い頃からの夢であった女子アナの道へと進んでいた。容姿端麗で明るく清楚な雰囲気醸し出す真凜は、入社一年目からすぐに女子アナとして頭角を表し、一気に人気女子アナとして多くの視聴者に知られる存在になっていった。

そんな女子アナとしてスターダムに駆け上がろうとしていたある日、一通のファンレターが届く。その封筒の中には、まだ真凜が未成年だった高校生の時の喫煙写真が封入されており、その写真を世間に公表されたくないければ、これからどんな命令にでも従うようにと言ふ脅しのメッセージが並べられた紙が添えられていたのだ。

一体誰がこんなファンレターを送って来たのか。真凜は得体の知れない差出人に怯えながら、もしもこんな写真が流出でもしたら、女子アナとしての地位が脅かされるだけでなく、メディアそのものから追放されてしまうのではないかとこの恐怖に駆られるのだった。真凜は見た目はおっとりとしたお嬢様という感じだったが、その内に秘めた野心には強いものがあり、絶対に人気ナンバーワン女子アナとしての地位は手放したくなかったのだ。それから定期的に送られてくるようになった脅迫のファンレター。そこに記された羞恥の指令に真凜は仕方なく従うようになる。ニュース現場の取材で滞在したビジネスホテルの部屋では、なぜか素っ裸で寝るようになって指示された真凜。わけも分からず指示通りにして深い眠りについていて、深夜、真凜の部屋へテレビのドッキリ番組のスタッフとリポーター役の二人組の女芸人コンビが侵入し

て来たのだった。事前に何も知らされていなかった真凛は、テレビカメラの前で醜態を晒した挙句、女芸人達から無理やりテレビカメラの前で恥辱の告白をさせられる。
「私は毎日、スケスケの・・Tバックの・
・・パ、パンティを履いてニュースを読んで
います」
「私は毎日、素っ裸で寝ています」
「最近、仕事が忙しくてストレスが溜まって
いるので、夜はいつもオ、オナニーをして発
散しています」
急遽、先輩アナの代役をお願いされた温泉
リゾートでは、再び女芸人コンビと共演する
事になり、一人だけ素っ裸に小さなバスタオ
ルを巻き付けただけの恰好で、今度は生放送
に出演する事になってしまふ。そこで女芸人
達の指示により、真凛はテレビカメラの前で
仕込みの男性客と無理やり卑猥な会話のやり
とりをさせられるのだった。

「お父さんの、ア、アソコ、すごく大きいです
ね」

「実は私・・・男の人の、ア、アソコが大好き
きで、アソコにばかりいつも目がいつてしま
うんです」

「今は彼氏はいないんですけど、彼氏ができ
たら一緒に混浴に入って・・・一杯エッチな
ことをしたいです」

「テレビの前の皆さん、私のエッチな本当の
姿をどうかご覧ください」

生中継の最後には、テレビの前の視聴者達に
素っ裸を晒した挙句に絶頂を迎えてしまう。

そしてついには、3万人以上の大観衆が見
守るプロ野球の試合の始球式に、真凛はあま
りに過激な衣装で登場するのだった。

■ 第一章 脅迫のファンレター

真夏の日差しが差し込む週末の野外音楽堂の外では、男性を中心に大勢の人だかりができていた。それは、女性アイドルグループの野外ライブに来たファン達の集団ではなかつた。彼らを取り囲む視線の先にいたのは一人の若い女性アナウンサーだった。彼女は、この日、野外音楽堂で行われるライブイベントの取材に訪れていたのだ。

「真凛ちゃん！」

男達の歓声が聞こえると、その若い女性アナウンサーは爽やかな笑顔を彼らに見せた。

「やっぱりで見るとかわいいな」

男達は、自分達に優しい笑みを見せながらも熱心に取材活動が続ける女性アナウンサーの姿に見とれていた。

女性アナウンサーにも劣らない人気を誇るその女性アナウンサーは、民放キー局FＤＮに入

社二年目の小川真凜だった。彼女は高校生の頃から雑誌の専属モデルとして活躍し、都内にある有名私立大学に在学中の二年生の時には大学のミスコンでグランプリを受賞するなど華々しい学生時代を過ごした後、その流れで自身の幼い頃からの夢であった女子アナの道へと進んでいた。容姿端麗で明るく清楚な雰囲気醸し出す真凜は、入社一年目からすぐに女子アナとして頭角を表し、一気に人気女子アナとして多くの視聴者に知られる存在になっていた。

野外音楽堂のイベントの取材を終えた真凜が帰ろうとすると、周りに集まっていたファンの男達は、真凜にサインを求め駆け寄って来た。

「真凜ちゃん！サインちょうだい！」

テレビ局のスタッフらは彼らを制止しようとしたが、真凜は立ち止ると彼ら一人一人に親切に対応し、サインに応じていくのだった。

「毎日、夕方ニュースを見えます！これから頑張ってください！」
「いつもお疲れ様！体に気を付けて頑張ってください！」
サインを貰ったファン達から掛けられる優しい言葉に、真凜は微笑みながら「ありがとうございます」といしますね」と握手を交わしながら御礼の言葉を返していった。
真凜にサインを求めるファンの男達の列はいつしか百人近くに上っていた。彼らは皆、あらかじめじめ用意していた色紙やメモ帳、ハンカチなどにサインを書いてもらっていたが、そんな中、三十代くらいの野球帽を被った小太りの男が真凜の前に立った。彼は黒いTシャツに白の綿パン姿で、手には何も持っていない。なかつた。
「サインをお願いします！」
小太りの男は厭らしそうな笑みを浮かべながら、真凜の前で下半身を突き出して見せた。

「あの、どこにサインをすれば良いですか？」
色紙も何も持たずに手ぶらで立つ男に、真凜
は戸惑った。
「ここをお願いします」
小太りの男がそう言って指差したのは、白い
ズボンの股間の部分だった。
「えっ・・」
それまで一人一人に愛想笑いを浮かべていた
真凜もさすがに顔が強張った。
「これで書いて下さい！」
小太りの男はズボンのポケットから黒の油性
マジックを取り出すと、戸惑う真凜に手渡し
た。男がサインを書いて欲しいと指差した白
いズボンの股間の部分は、良く見ると生地が
薄く中が透けて見えていた。しかも男は下着
を履いていないのか、大きく膨れ上がった局
部がくつきりと浮き出て、その形が分かるだ
けでなく先端部分の様子までもが透けてモロ
に見えていたのだ。

真凛は、男の白いズボンから透けて見える
局部のあまりの大きさに驚きを隠せず、いつ
のまにか顔を真っ赤に染めていた。
「真凛ちゃん、早くしてもらえるかなあ」
小太りの男は、恥じらう真凛の姿を楽しんで
いるようだった。
「あ、あの、もし良ければ帽子の方にサイン
をしますけど・・・」
ズボンの股間部分にサインを書くとなると、
間違いく男の局部に触れることになってし
まい、それは真凛にとって恥ずかしくて堪ら
ず、やんわりと回避しようとしたのだ。
「ごめんね、この野球帽は凄く大事なものだ
から、幾ら大好きな真凛ちゃんでもサインと
か書いて欲しくないんだ」
小太りの男に上から目線で断られてしまった
真凛は、近くに居たテレビ局のスタッフらに
救いを求める眼差しを向けたが、誰一人とし
て助けてくれようとする者はいなかった。皆
清楚で美しい人気女子アナの真凛が、恥じら

いながら男の股間を触り、サインする姿を見てみたかったのだ。

どうして誰も助けにくれようとしなの。

私、大勢の人が見ている前でこんな男の人の股間なんか触りたくない。お願い、誰か助けてください。真凛は同性の女性スタッフ達にも縋るような目を向けたが、彼女達もまた無表情で様子を窺っているだけで全く助ける素振りは見せなかった。

「真凛ちゃん、早くしてくれないかな。」

まだ後ろに一杯待っているんだけど

小太りの男の後ろにサインを求めて並んでいるファン達の男達からブーイングにも似た声がかかる。真凛を追い詰めた。

「わ、分かりました。」

騒然となり始めたファン達に、真凛はこれ以上拒んでも無理だといった諦めたのか、男の前にしゃがみ込むと、男の膨らんだズボンの股間に油性マジックを当てていったのだった。

「いやあっ」

油性マジックを握った真凜の手が男の股間に触れると、膨らんだ局部がピクンと動いたのだった。男の顔を見上げると、不敵な笑みを浮かべながら見下ろしているのが分かった。真凜は白いズボンから透けて見える巨大な局部に暫し目を奪われてしまっていた。真凜は学生時代からとてもモテたが、これまでに交際した男性は僅か二人しかいなかった。そして、男性経験と言えばその内の一人しかなく、その時の彼氏の局部しか見た事がないかったのだ。男性経験の少ない真凜にはそれが一般的な男性の局部のサイズだと思い込んでいる。男のズボンから透けて見えるそれは、昔の彼ののよりも二倍近くの大きさがあったのだ。ろう。真凜は大勢のファン達が見ている事も忘れて、うつとりした目で男の股間を見つめてしまっていた。

「真凛ちゃん、いつまでその人の股間を見
てるんだよー」
「俺達も忙しいんだから、早くしてくれない
かなあー」
サインを求めて並んでいるファンの男達の中
には、真凛が男の前にしゃがみ込み、大きく
膨らんだズボンの股間を至近距離から見つめ
ている様子をスマホで撮影している者たちも
いた。
「ご、ごめんなさい」
男達の声に我に返った真凛は、油性マジック
をもう一度、男のズボンの股間に当てて、そ
の膨らんだ局部の感触を確かめるように自分
のサインを書いていった。
「ありがとう。真凛ちゃん！」
股間にサインをもらった男は厭らしい笑みを
浮かべながら真凛に御礼を言うところ、そのま
ま帰って行った。
男のあまりに大きな局部に触れてしまった
真凛は、すっかりエッチな気分になってしま

つたのか、清楚で美しい顔をほんのりと上気
させたまま、手に残る感触を確かめながら残
りのファン達にサインを書いていくのだった
真凛が、取材を終えてテレビ局に戻るとデ
スクの上には山積みになったファンレターの
束が置かれていた。それは同じ部屋で働く誰
もが見慣れたいつもの光景だった。他の女性
アナウンサーの席にも届いたファンレターは
置かれていたが、真凛の数には到底及ばなか
った。それほど真凛に届くファンレターの数
は毎日膨大で、真凛の人気の高さを局内の同
僚達にも知らしめていた。
「真凛ちゃん、お疲れ様」
取材から戻って来た真凛に声を掛けてきたの
は隣の席に座る先輩女性アナウンサーの吉沢
彩乃だった。三十歳の彼女は、真凛の大学の
先輩にもあたり、真凛が入社する前から彼女
の事を可愛がっていた。そして真凛も吉沢の
事をアナウンサーとしても一人の女性として

も尊敬していた。吉沢は入社当時から元々、報道を志望していた事もあり、最初の数年はニュース番組を中心に活躍していたが、真凜が入社した去年からは、真凜に押し出される形で本人の希望とは真逆のバラエティ番組などのアシスタントの仕事ばかりをするようになった。そしてこの日もこれからバラエティ番組の収録で若手芸人達とロケに行くらしい。――お疲れ様です――

真凜が先輩の吉沢に挨拶をすると、吉沢は真凜のデスクに山積みになったファンレターを恨めしそうに見ながら出掛けて行った。

都内にある一人暮らしの自宅マンションに帰宅した真凜が一日の疲れを癒しながら寛いでいると、部屋の時計はすでに深夜0時過ぎを示し、夕方ニュース番組に携わっている真凜がいつも寝る時間だった。そしていつも眠る前には、その日、会社に届けられた自分

へのファンレターすべてに目を通すのが日課
になつていた。真凛は一つずつ丁寧に封筒を
開け、ファンの書いてくれたメッセージを読
んだ。いつもニュース観てます。頑張つて下
さい、というものから、ニュース番組で原稿
を読む時の表情や声のトーンについての確な
アドバイスをしてくれるものなどもあり、真
凛はいつもファンレターを感謝の気持ちで受
け止めていた。
すると、今夜は届いたたくさんの方のファンレ
ターの中に、ひと際目立つ真っ赤な封筒が混
じつていたのだ。差出人等の記載もなく、普
段あまり見たことのない色の封筒が真凛は妙
に気になり、それを恐る恐る開けてみると、
中からは一枚の手紙と写真が出てきたのだっ
た。
何よこれ・・・。真っ赤な封筒に入ってい
た一枚の写真を見た真凛は、思わず絶句した
写真に映っていたのは、高校三年生の時の真
凛だった。そして写真に映る彼女は未成年で

あるにも関わらず、制服姿でお酒を飲み、赤
くなつた顔で煙草を吸っていたのだ。当時、
真凜は一度だけモデルの先輩から強引に誘わ
れて合コンに参加した事があつた。その時、
真凜はカラオケボックスの中で先輩達から無
理やりお酒を飲まされた挙句に、煙草まで吸
わされたのだ。写真はまさにその時の様子を
撮つたものだった。どうしてこんな写真があ
るの・・・。真凜は、自分が知らない間に、
まさかこんな写真が撮られているなどとは今
まで思つてもいなかった。写真の中の真凜は
お酒に酔つているのか、笑みを浮かべながら
煙草を吸つていて、とても誰かに強要されて
吸つているようには見えなかった。
そして、写真に添えられていた手紙には、
動揺する真凜をさらに脅かすメッセージが記
されていた。
『人気女子アナとして大活躍の小川真凜さん
私はあなたの秘密の写真をまだたくさん持つ
ています。これらの写真がもしも世間に流出

でもしたら、あなたの女子アナとしての立場
はどうなるのでしょうか。人氣が急落するだ
けならまだ良いですが、もしかしたらメデイ
アから追放されてしまうかも知れませんね。
あなたがもし、まだまだ女子アナとして活躍
を続けたいと願うなら、これから私が送る命
令に従って下さい。あなたが私の命令に従い
続ける限りは、これらの写真は封印したまま
にしておきます。でも、もしあなたが私の命
令に背くような事があれば、その時にはこれ
らの秘密の写真は世間に公表されるでしょう
メッセーじの最後には、『あなたの大切な大フアン
A』と記されていた。手紙に記されたメッセ
ーじを読んだ真凛は、恐ろしさのあまり体の
震えが止まらなかった。
女子アナとして着実にスターダムへと駆け
上がっている事は自分でも良く分かっていた
そして毎日の忙しい日々にも充実感を抱いて
いた。幼い頃から描いていた自分の夢がよう
やく現実となり、今は楽しくて仕方なかった

のだ。なのに、そんな日々が突然音を立てて
崩れ落ちていこうとしている。今、手にして
いる充実感が一瞬で奪われようとしている。
真凛はまだまだ夢を見ていたかった。この夢
の続きをこれから歩いていきたかった。こ
の夢のような日々を絶対に失いたくなかつた。
人気女子アナの地位も誰にも譲り渡したくは
なかつた。私は誰よりも輝ける存在なの、真
凛はおっとりとしたその外見の奥に、いつも
そうした強い野心を抱いていたのだ。
写真を撮られたこの時の事情を何も知らな
い大衆がこの写真を見れば、明らかに未成年
の真凛が悪い仲間たちと一緒にお酒を飲み、
煙草を吸っていたようにしか思わないだろう。
そして日常的にそういう生活をお過ごししてい
たのではないかと勝手に推測するだろう。そう
なれば、マスコミはこぞって真凛を叩き、真
凛の女子アナとしての人気は急落し、手紙に
書かれているように下手をすればメディアの
世界からも追放されてしまいかも知れない。

悪い情報は一気に拡散し、世間の人気や社会的信用など一瞬にして失われてしまうものなのだ。

真凛にはもう迷う余地はなかった。この赤い封筒を送って来た『大ファンA』と名乗る相手がこれから自分に与えてくるどんな命令にでも従うしかないと思った。例えおぞましい命令であつたとしても、今の幸せな日々を失う恐さに比べれば、きっと耐えられると思つたのだ。

■ 海老沢薫 B L O G

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ 「羞恥」 「露出」 「辱め」 をテーマとした小説シリーズや、各種コンテンツ情報などを配信。

■ 海老沢薫 Web 連載小説

『 清楚な美人妻 彩 27 歳 絵画モデル編 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 国民のペットへと堕ちていくヒロイン ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 女神の憂鬱 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675>

『 女教師 玲奈 25 歳 ー 女性教諭の前代未聞の不祥事 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186>

『 美人社長 里帆 26 歳 ー 若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885>